

学問を語る言葉

——高津春繁『言語学概論』のテキスト分析から——

犬塚 博彦

1. はじめに

本稿は、高津春繁『言語学概論』(有精堂, 1957)をテキストとして、その中にあらわれた著者の言葉とその用法を分析し追究することにより、言葉の奥にある著者の学問研究に対する姿勢およびその思考法を読み取り、その奥義を探究することにある。高津春繁『言語学概論』については、すでに犬塚(1997)において、その「まえがき」部分の言語表現を、文献に即して意味を解読する方法を用いて分析および考察を試みているが、本論考においては、「まえがき」部分と並んで学問研究および言語研究に対する著者の姿勢が凝縮されていると考えられる第一章の冒頭部分をその分析対象とすることにする。

テキスト分析の方法としては、まず本論考において考察の対象とする高津春繁『言語学概論』の第一章の冒頭部分を原文どおりそのままの形で提示する。その際、有精堂版の原典のページ数と行数をあわせて付記することにした。テキストの提示に続いて、それぞれの部分ごとにその言語表現を形式面および内容面の二つの観点から分析し考察を加えていくことにする。

テキストの形式面における分析では、学問研究に対する著者の姿勢を知るうえでの手がかりとなる言語表現を必要に応じて変数(X, Y, A, B…)を用いて表現の型として抜き出し、用語間のコロケーション(collocation)に着目しつつ、学問について語る際に必要不可欠となる概念を含む学問上の基本語彙がどのように用いられているかを浮き彫りにすることにその目的がある。

次に、内容面における考察では、言語表現の形式面における分析の際に抽出した学問上の基本語彙について、古代ギリシア以来今日まで脈々と受け継がれている西洋の学問の伝統を視野に入れ、ギリシア語やラテン語などの原語に立ち返って、原語がもつその本来の意味から考察することにした。

つまり本論考は、高津春繁『言語学概論』における言語表現を一つの入り口として、そのテキストに基づいてロゴス(言葉をもって真理を探究する態度)を忠実にたどることにより、その奥にある学問研究に対する著者の声を聞き出し、学問を語る際に必要不可欠となる概念を表わす語彙について、それぞれの原語の本来の意味を詳細に吟味しつつ考察を加えたものである。私たちが取り組んでいる言語研究は、言わば「分科の学」として個別の学問領域に属するものではあるが、

学問を語るその言葉の中に、個別の領域を越えて西洋の学問一般に通じる普遍的なる性質を見出すことができるということを、本論考におけるテキスト分析を通して明らかにしていくことにしたい。

2. 分析

2.0 分析対象となるテキストの提示

あらゆる科学においてもっとも重要なのは、研究の対象をつぶさに観察し	(1.01)
て、その結果を整理し組織化して、もっとも単純な原理に統一することにあ	(1.02)
り、一個の原理によって多くのそれまでは不可解と想われていた現象を解き	(1.03)
得るにいたる過程は、われわれに一種の美的観念をさえ抱かせる。しかしな	(1.04)
がら、このような結果を得るにいたる前提は、問題の出しかたの如何にかか	(1.05)
っていると云ってよいであろう。問題の提起のしかたは、一つには研究の対象	(1.06)
そのものの、ますます進歩する方法論による、さらに深い観察によって常に	(1.07)
変化して行く。問題の出しかたと方法論とは一つのもので、これを誤ると	(1.08)
きには、研究にそそがれた多くの努力は、いわば無駄骨折であり、たとえそ	(1.09)
の中に見事な識見が閃いていても、これは所詮何らの統一のない色彩の混在	(1.10)
と同じく、名画とはならないばかりか、絵ともみられないであろう。このよ	(1.11)
うな誤った方法によって得られた結果の中に真理を認め得ても、それは偶然	(1.12)
の結果にすぎず、これでは真の学問には到達できない。古代の多くの語源に	(1.13)
関する文献中に散在するこの種の真理は、しばしばこのようなやりかたから	(1.14)
出たものであって、真の意味での学の名に値しないものが多い。この意味	(1.15)
で学問の発達の一つには方法論の発達と同じであるということができると	(1.16)
ある。	(1.17)

2.1 テキスト(1.01-04)の分析と考察

2.1.1 テキスト(1.01-04)の形式面における分析

まず分析に先立って、第一章冒頭の第一文のテキスト「あらゆる科学において……われわれに一種の美的観念をさえ抱かせる。」(1.01-04)の構造を概観することから始めることにする。テキスト(1.01-04)においてはTopic-Commentが二組見出される。最初のTopic-Commentにおいては、そのTopicは「あらゆる科学においてもっとも重要なのは」(1.01)という部分であり、これを受けるCommentには次に示す三つの内容が含まれる。すなわち、一つめは「研究の対象をつぶさに観察」(1.01)するということであり、二つめは「その結果を整理し組織化」(1.02)するということであり、そして三つめは「もっとも単純な原理に統一する」(1.02)ということである。これに続く二組目のTopic-CommentにおけるTopicとしては、「一個の原理によってそれまでは不可解と想われていた現象を解き得るにいたる過程は」(1.03-04)という部分がそれにあたり、これを受けるCommentは「われ

われに一種の美的観念をさえ抱かせる」(1.04)という構造になっている。

では上に示した一組目のTopic-Comment(1.01-02)内部の言語表現について、その形式面に着目して分析することにした。この部分を一つの大きな表現の枠としてとらえて変数を用いて表わすと、「あらゆるXにおいてもっとも重要なのは、Yにあり」となる。ここから著者は、Xにおいてはさまざまに重要なものがある中でYの部分に述べられている内容が最も重要なものであると考えているという著者の価値判断を読み取ることができる。しかもそのXが、個別のXではなくて「あらゆるXにおいて」あてはまるものであることをほのめかす全称命題的な言い方になっていることから、個別のXの奥に内在するXの普遍的性質をも視野に入れた含蓄のある言語表現であるとみなすことができる。

さてここで変数X、Yをもとの言葉にもどすと、Xは「科学」であり、Yは上で言及した三つのCommentにあたる部分であるが、このうち中心的な部分のみを抜き出すと、[1]「研究の対象をつぶさに観察」し、[2]「その結果を整理し組織化」して、[3]「もっとも単純な原理に統一する」という箇所がそれにあたる。このうち[1]および[2]をさらに変数を用いて一般化すると「AをBする」という表現の型をしていることがわかる。「AをBする」という表現から、著者はそもそもAというものはBするものであるとらえているということを読み取ることができる。ここで変数を用いて表わした部分をもとの表現に戻すと、[1]からは「対象というものは観察するもの」であり、しかもその修飾表現から、それはただ観察するものではなくつぶさに観察するものであると受け止めているということ、そして[2]からは「結果というものは整理し組織化するものである」と認識しているということがわかる。この三つのCommentが表わすその内容は、順序としては[1]における「観察」にはじまり続いて[2]の「観察結果の整理、組織化」があり、そしてさらに[3]の「もっとも単純な原理に統一」するというように段階的に進められていくものであるということが本文の言語表現からわかる。この三者は、多なるものから一なるものへ向かって用語が配置されていることにここで注意しておきたい。

次に二組目のTopic-Comment(1.03-04)内部の言語表現について、その形式面に着目して分析することにした。この部分を一つの大きな表現の枠としてとらえて変数を用いて表わすと、「Xは、われわれに一種の美的観念をさえ抱かせる」となる。このうち「美的観念」という表現に含まれる「美」という言葉の響きから、著者はTopicとなるXにあたる部分が好ましいものとして肯定的に受けとめているということを読み取ることができる。

さてその「美的観念をさえ抱かせる」ことになるXにあたる部分をもとの言葉

に直すと、「一個の原理によって多くのそれまでは不可解と想われていた現象を解き得るにいたる過程」となる。このうち「一個の原理」(1.03)によって「多くの…現象」を解くという表現から、一なるものから多なるものへという方向性を内に含む段階を読み取ることができる。またこの言語表現において中心となる語は「過程」であるが、それを修飾する「…にいたる」という表現もまた過程そのものを連想するものであって、この考え方を推し進めると、直前の「現象を解く」という部分が「過程」を経てその先にある「結果」として位置づけられることになる。

また、Topic内部の言語表現に着目すると、「それまでは不可解と想われていた現象」(1.03)という箇所からは、「現象」というものは不可解に想われることがあり、さらに「現象を解き得る」(1.03-04)という表現からは「現象」というものは「解く」ものでありまた解かれるべき性質のものであるという用語間の関係を読み取ることができる。

そしてTopicとしてのXの部分を受けるCommentは、その表現の枠としては「われわれに……を抱かせる」となる。「われわれに」という言葉から、認識の主体となる私たち自身との関わりがここにおいて示されている。また、「一種の美的観念をさえ抱かせる」という表現についてであるが、「美」という言葉自体は人間のもつ四つの認識能力、すなわち知性・理性・感性・悟性のうち、感性を連想させるものではあるが、本文では「美的」となっていることから、学問において知性の眼を通して観たときに対象となる「ものそのもの」が整然とした形でその姿をあらわすさまを感性を通してとらえていることを示すものであり、ここにおいてその前後にある「一種の…さえ」という表現のもつ意味合いもはっきりとしてくる。また、「美的観念を抱かせる」という表現からは、それまでは私たちが気づくことはなかった「美そのもの」がそこにあって、あることを契機としてその存在に私たちが気づくそのきっかけが与えられるということをほのめかしていることを読み取ることできる。

以上が本文の冒頭の第一文における言語表現の形式面からの分析であるが、学問研究の本質を考える上で必要不可欠な概念を含む学問上の基本語彙がこの中にいくつかあらわれている。以下に続く内容面における考察では、古代ギリシア以来の西洋における学問の伝統の中で、学問研究の本質を考える上でそれなしではあり得ない重要な概念として、「科学」「対象」「観察」「原理」「現象」および「過程」という言葉について、ギリシア語やラテン語などの原語に立ち返って、原語がもつその本来の意味から説き起こすことにしたい。

2. 1. 2 テキスト(1.01-04)の内容面における考察

まず最初に、冒頭の「あらゆる科学において」(1.01)という箇所に含まれる「科学」という言葉から考察することにしたい。「科学」という言葉は、英語の‘science’に対応する語であるが、英語の‘science’は語源的にみるとラテン語の女性名詞‘scientia’にさかのぼる。ラテン語の‘scientia’の語形は、動詞‘sciō’の現在分詞形‘scient-’‘sciēns’に由来するものであるが、動詞‘sciō’は「知っている」(英語の‘know’にあたる)という意味であることから、ラテン語の‘scientia’には「知っているということ」すなわち「知識」という意味がそのもとにあることがわかる。ところでラテン語の‘scientia’のもとになる‘sciō’という言葉は、語源的にはさらにギリシア語の‘skhizein’という語にさかのぼり、‘skhizein’というギリシア語には「分ける」とか「分割する」という意味がある。

ではここでラテン語の‘scientia’という語のもつ「知識」という意味と、それに対応するギリシア語の‘skhizein’という語のもつ「分ける」という意味の間のつながりについて考察しておきたい。西洋古代において、とりわけアリストテレス以前の古代ギリシアにおいては、すべての知的な思考活動は「賢きこと」(sophia)を「好きこのむ」(philo-)こと、つまり「智」(sophia)を「愛し求める」(philo-)活動(ピロソ피아 philosophia)の中に位置づけられていた。この時期における知的活動においては、ものの根源からの認識を目的とすることに重きが置かれ、研究対象や研究方法が渾然一体となっていて未だ分化されていない状態にあり、知的思考活動一般を意味する「学問」という色彩が強いものであったと言える。ところがアリストテレス以後、学問の進展にあわせてその研究対象や研究方法がピロソ피아 (philosophia)から分かれて(skhizein)独立するようになり、ここにそれぞれの「分科の学」としての「科学」が成立することになった。ここにおいて知的思考活動そのものの中に「実証性に基づく客観的で体系的な知識」という後の時代に使われることになるラテン語の‘scientia’という語に含まれる考え方を観ることができるのである。その科学の目的なるものは、「現象間に統一的な法則を見出し、そこに客観的な理論を確立すること」にあり、実証的な方法がとられるのである。

では次に、「対象を…観察して」(1.01-02)という箇所に含まれる「対象」という語と「観察」という語についてその原語にさかのぼってその意味を考察することにしたい。

「対象」という言葉は、英語の‘object’に対応する語であるが、英語の‘object’は語源的にみるとラテン語の中性名詞‘objectum’にさかのぼる。ラテン語の

‘objectum’の語形は動詞‘obiciō’の完了分詞の中性形に由来するのであるが、‘obiciō’という語は‘ob-’(「前に」)と‘jaciō’(「投げる」「置く」の意)の二つの要素から成り立っている。このことから、動詞‘obiciō’から語形変化して生じた‘objectum’という語は、字義通りにみると「前に投げかけられたもの」とか「前に置かれたもの」という意味を内に含んでいることがわかる。これを少し言葉を補って解釈するとすれば、「前に投げかけられたもの」とは「(自己の眼の)前に投げかけられたもの」のことであり、「前に置かれたもの」とは「(自己の眼の)前に置かれたもの」のことであり、前項に於ける形式面での分析の中で著者の言語表現におけるコロケーションから、対象とは観察するものであり観察されるものであるという関係にあることをすでにみた。「観察」とは「ある対象、過程がどのようなか、どのようにして生起するかという事実をありのままに確認すること」(粟田他編 1979:44)であり、この定義から「観察」という言葉は「対象」および「事実」と非常に密接なつながりがある概念であるということがわかる。観察による事実の確認を通して観察をする私たち自身に対して理論的な問題が提起されることになり、それゆえ事実を観察するということとはあらゆる科学的研究の出発点となるのである。

次に「観察」(observation)という語についてであるが、前項における形式面での分析の中で著者の言語表現におけるコロケーションから、対象とは観察するものであり観察されるものであるという関係にあることをすでにみた。「観察」とは「ある対象、過程がどのようなか、どのようにして生起するかという事実をありのままに確認すること」(粟田他編 1979:44)であり、この定義から「観察」という言葉は「対象」および「事実」と非常に密接なつながりがある概念であるということがわかる。観察による事実の確認を通して観察をする私たち自身に対して理論的な問題が提起されることになり、それゆえ事実を観察するということとはあらゆる科学的研究の出発点となるのである。

ではここで「事実」という語について少し触れておきたい。「事実」という言葉は、英語の‘fact’に対応する語であるが、英語の‘fact’はラテン語の中性名詞‘factum’にさかのぼる。ラテン語の‘factum’という語形は動詞‘faciō’の完了分詞の中性形に由来するのであるが、‘faciō’は「為す」という意味であることから、ラテン語の中性名詞‘factum’には「為されたもの」という意味がそのもとにあることがわかる。ところで、「為されたもの」とは、ある時ある場所において生じる事柄であるので、「事実」とは「時間上、空間上に実在するもの」として見出される存在または出来事であると言えることができる。これはまた、「理論との関係において、理論の対象または理論を裏づけるものとして実際に存在しているものごと」を意味する(村治編 1974:178)。

次に「原理」という言葉は、英語の‘principle’に対応する語であるが、英語の‘principle’はラテン語の‘prīncipiūm’に由来する。ラテン語の‘prīncipiūm’

という語には「始まり」とか「基礎」という意味があるが、この語は語源的にはさらに ‘prin-ceps’ という語形と関連がある。‘prin-ceps’ は、‘primus’（「第一の」「初めの」）と ‘capitō’（「取る、とらえる」「選び出す」）の二つの要素から成り立っている。このことから、ラテン語の ‘prīncipiūm’ には「初めに置かれるべきもの」とか「最初に取るべきもの」という意味がそのもとにあるということがわかる。これは学問というものを厳密に基礎づけようとする場合に、その当該の学問を展開していく上での出発点としてまず初めに置かれるべきものとしてこの原理なるものが位置づけられるものであるとすることができる。

次に「現象」という言葉は、英語の ‘phenomenon’ に対応する語であるが、英語の ‘phenomenon’ は語源的にはギリシア語の ‘phainomenon’ に由来する。ギリシア語の ‘phainomenon’ は動詞 ‘phainein’ の受動分詞形であり、‘phainein’ には「現わす」とか「示す」という意味がある。このことからギリシア語の ‘phainomenon’ という語には「現わされているもの」とか「示されているもの」という意味がそのもとにあることがわかる。ここで言う「現わされているもの」とか「示されているもの」とは、私たちの眼前に直接にそのものを示し、感性的な直観に直接与えられるものであり知覚の対象となるもののことである。それゆえ現象にロゴスを与えることがすなわち学問であると言っているのである。

「過程」という言葉は、英語の ‘process’ に対応する語であるが、英語の ‘process’ は語源的にはラテン語の ‘prōcēssus’ という語にさかのぼる。ラテン語の ‘prōcēssus’ は ‘prō’ と ‘cēssus’ の二つの要素から成り立っているが、このうち前者は「前のほうへ」という意味を持ち、後者は動詞 ‘cēdō’ の完了分詞形に由来するものであって、‘cēdō’ には「行く、動く」という意味があることから、全体としてラテン語の ‘prōcēssus’ という語には「前のほうへ向かって動くこと」という意味がそのもとにあることがわかる。ここで言う「前のほうへ向かって動く」というのは時間的な観点からみた場合のそれであって、時の経過に関する言葉であり、時間というものを内に含む言葉である。これはまた、変化・発展の進行しつつある様相を意味し、変化・発展が完成されてしまった状態とは対立する概念である。

2. 2 テキスト(1.04-1.06)の分析と考察

本節では、テキスト(1.04-1.06)「しかしながら、このような結果を得るにいたる前提は、問題の出しかた如何にかかっていると云ってよいであろう。」という一文における言語表現の形式面および内容面についてそれぞれ分析をし、考察を加

えていくことにする。

2. 2. 1 テキスト(1.04-1.06)の形式面における分析

まず、直前のテキストとのつながりをみると、「…得るにいたる過程」(1.04)および「…結果を得るにいたる前提」(1.05)に見られるごとく、「…にいたるX」という同じ型をもつ言語表現が繰り返されていることに着目したい。前にみたように「…にいたる」という表現は過程を連想するものであり、このことから「過程」を中心に「結果」および「前提」がキーワード的な存在となっていることがわかる。一般的なものごとの順序としては、まず初めに「前提」(A)があつて次に「過程」(B)そして最後に「結果」(C)へと到達するというのが普通であるが、ここでは「過程」(B)→「結果」(C)→「前提」(A)の順に言葉を配置することによって、「前提」(A)となる部分のその内容がまさに焦点となるべき重要な部分であることを浮き彫りにしている。以上を踏まえてこのテキストを形式面から解釈すると以下ようになる。すなわち、「われわれに一種の美的観念をさえ抱かせるのが現象を解き得るにいたる『過程』であるのだが、美的観念を抱かせるような『結果』を得るにいたる『前提』がそこにはあつて、それが『問題』の出しかた如何にかかっている」という構造になっている。つまり「問題の出しかた」(1.05)の重要性を著者はまさに強調しているのであるが、同一もしくは同種の表現がそれに続くテキストでもあらわれていることから(「問題の提起のしかた」(1.06)、「問題の出しかた」(1.05))、このテキスト全体の中心的な内容にあたる部分であるということがわかる。

2. 2. 2 テキスト(1.04-1.06)の内容面における考察

ここでは「問題」という言葉について考察することにしたい。「問題」という言葉は、英語の‘problem’に対応する語であるが、英語の‘problem’は、語源的にさかのぼるとラテン語そしてさらにギリシア語の‘problema’にその原形を求めることができる。ギリシア語の‘problema’という語は‘pro’と‘blema’の二つの要素から成り立っており、このうち‘pro’は「前のほうへ」という意味があり、‘blema’は動詞‘ballo’(「投げる」の意)に由来することから、ギリシア語の‘problema’には「前のほうへ投げかけられたもの」という意味がそのもとにあることがわかる。ここで言う「前のほうへ投げかけられたもの」とは、私たち自身の眼前に投げかけられたものということであり、これはすなわち、私たち自身の中で確かにそうであると認識している既知なる部分と、未だ知られざるものでこれから対処されるべき性質を持つ未知なる部分のちょうど境目に存在

するということにその特徴がある。このように「問題」(problema)という語には「対処されるべきもの」という意味を内に含むものであるために、それに対処すべく「問題」なるものは常に「提起」されていなければならず、提起された問題はまた常に解決されねばならないものであると言う関係を読み取ることができるのである。

2. 3 テキスト(1.06-1.08)の分析と考察

本節では、テキスト(1.06-1.08)「問題の提起のしかたは、一つには研究の対象そのものの、ますます進歩する方法論による、さらに深い観察によって常に変化して行く。」における言語表現の形式面および内容面についてそれぞれ分析をし、考察を加えていくことにする。

2. 3. 1 テキスト(1.06-1.08)の形式面における分析

まず分析に先立ってテキストの表現の型を抜き出すと、「問題の提起のしかたは、一つには…X…によって常に変化して行く」となる。このうち「常に変化して」という表現から、問題の提起のしかたそのものは一にとどまることなく時間の流れの中でそのありようを変えていくという意味において動的要因を内にもつものであることというを読み取ることができる。また「一つには」という表現からは、Xだけがその要因のすべてではないことを暗示していることがわかる。

さてここで、問題の提起のしかたが変化していく要因の一つとして位置づけられる変数Xにあたる部分をもとの表現に戻すと、X＝「研究の対象そのものの、ますます進歩する方法論による、さらに深い観察」となる。この部分は「研究の対象そのものの」(1.06-07)という表現がどの部分を修飾するかという点で一見すると把握しにくい箇所ではあるが、テキストの言語表現を忠実に読み解いていくと以下のことが明らかになってくる。すなわち、すでに2.1.1および2.1.2で行なった言語表現の分析から、対象とは観察するものでありまた観察されるものであるという概念どうしの関係があることをみた。このことから、「研究の対象そのものの」(1.06-07)は「さらに深い観察によって」(1.07)を直接に修飾するものであり、「ますます進歩する方法論による」(1.07)は挿入的言語表現であると考えるのが自然である。この考え方に立つと、テキスト冒頭第一文の「研究の対象をつぶさに観察」(1.01)という内容を受けてそれを一歩進める形で「研究の対象そのものの……さらに深い観察」(1.06-07)というように下線部分で示した強意表現が用いられていることの意義も明らかになってくる。

さて、上において挿入的言語表現であると分析をした「ますます進歩する方法

論による」(1.07)という箇所であるが、この表現からは、方法論というものは進歩すべきものであると著者がとらえているということを読み取ることができる。すると先に見た「変化していく」とは「進歩する」という方向での変化であるということがテキストから明らかとなる。

2. 3. 2 テキスト(1.06-1.08)の内容面における考察

ここでは「方法論」という言葉について触れておくことにする。「方法論」という言葉は英語の‘methodology’に対応する語であるが、その語形はラテン語の‘methodologia’に遡る。ラテン語の‘methodologia’は、ギリシア語起源の‘methodos’および‘logos’の二つの部分から成り立っている。すでに犬塚(1997)において考察したように、‘methodos’は日本語では「方法」という訳語をあてられる語であるが、これは‘meta-’(～に沿って)および‘hodos’ (道)の二つの要素を内に含むことから‘methodos’には「目標に向かう道に沿って進むこと」という意味がそのもとにあると言える。また‘logos’ (ロゴス)は西洋の学問において知的思考活動をする際にそれなしではあり得ない根幹をなす概念であって、思考活動において、初めの段階ではまだぼんやりとしていて言葉にもならないような星雲状のものを一つひとつ言葉に直していくことであり、「(言葉にならないものを)言葉に直したもの」がロゴスのもつその本質的な意味にある。以上‘methodologia’という語の構造を踏まえて、これを言語研究においてあてはめると、「言語とは何かという目標に向かう道に沿って向かうこと」の中に言語研究における「方法」(methodos)があり、それを一つひとつ言葉に直したもののの中に道筋を見出し、その道筋をさらなる言葉に直したものが「方法論」(methodologia)である。この意味において方法論とは「方法の方法」とであると言うことができる。

3. まとめ

以上、テキスト(1.01-08)の分析を通して浮き彫りになったキーワードは「問題提起のしかた」および「方法論」の二つである。このうち「問題提起のしかた」は「研究の対象そのものの…さらに深い観察によって常に変化して行く」(1.06-08)という表現にあるように、過去から現在、そして現在から未来へと向かう時間の流れの中で、研究対象を観察する認識の主体となる私たち自身の取り組みのしかたによって、常に変化していくのでありそこに動的要因を見出すことができる。そしてその動的要因を引き起こすきっかけを提供するのが「ますます進歩する方法論」(1.07)である。つまり「ますます進歩する方法論」が「問題の提起のしかた」そのものに働きかけ、この二つの変数(variable)が相俟って、時間の

流れの中で一にとどまることなく常に「発達」という形を伴って学問研究においてその姿を映し出していくとすることができる。そしてまさにそのかなめとなるべき「方法論」なるものは、本稿において考察したように、認識の主体となる私たち自身の中で、あるものとあるものが同じか違うか、違うとしたらどこがどのように違うかを一つひとつ言葉に直し、直した言葉どうしの間に関係を見出し、その関係に道筋をつくり、その道筋をさらなる言葉に直したものであるとすることができる。この「方法論」なるものも時の流れの中で変化し発達していくものであり、それゆえ、「学問の発達は一つには方法論の発達と同じである」(1.16)という著者の言葉へと結ばれていくのである。

参考文献

- 粟田賢三他編(1979)『岩波哲学小辞典』, 岩波書店, 東京。
- 犬塚博彦(1996)「ものを知るとのこと」『盛岡大学英語英米文学会会報第7号』, pp.13-24.
- 犬塚博彦(1997)「言語を研究するということ(1)——高津春繁著『言語学概論』におけるテキスト分析を通して——」『盛岡大学紀要第16号』, pp.11-18.
- 高津春繁(1957)『言語学概論』, 有精堂, 東京。
- コーンフォード(1995)『ソクラテス以前以後』(山田道夫訳), 岩波書店, 東京。
- 田中秀央編(1952)『羅和辞典』, 研究社, 東京。
- 田中美知太郎(1987)『学問論』[田中美知太郎全集14], 筑摩書房, 東京。
- 寺澤芳雄編(1997)『英語語源辞典』, 研究社, 東京。
- 林達夫他編(1993)『哲学事典』, 平凡社, 東京。
- 廣松渉他編(1998)『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, 東京。
- 古川晴風(1989)『ギリシヤ語辞典』, 大学書林, 東京。
- 松平千秋, 国原吉之助(1992)『新ラテン文法』, 東洋出版, 東京。
- 村治能就編(1974)『哲学用語辞典』, 東京堂出版, 東京。

(岩手大学教育学部英語教育講座)